

## 現地報告 パレスチナ、従属の深みへ

東京大学名誉教授 長沢栄治

本稿は「パレスチナ学生基金」理事長の長沢栄治先生が、「パレスチナ通信 第29号」に掲載された「現地報告」です。昨年12月に現地を訪問された際の現地報告ですが、現地は非常に憂慮される状況になっているようです。

パレスチナ学生基金はパレスチナの学生に大学で勉強をする機会を与えるために設立された基金です。パレスチナや周辺諸国に関心がある有志で運営されていますが、小さな基金ですので、パレスチナの大学へ入る資金を援助できるのは、一年に一人か二人です。できればもう少し増やしていきたいと願っています。

URL を記載しておきますので、ご関心のある方は、どうか開いてみてください。  
<http://palestinescholarship.org/> (塩尻)

昨年(2022年)12月にパレスチナを6年ぶりに訪れた。最初の訪問は40年前、エジプトに長期滞在していたときであり、1982年の冬か83年の春だったか、どうも記憶が怪しい。それ以来、数えても4回しか訪問しておらず、いずれも短期の滞在だった。

今回の訪問で感じたのは、社会全体が鬱屈している雰囲気だった。ウクライナ危機の物価高による生活困窮の影響もあるのであろう、東エルサレムでは物乞いをしている老人の姿が目立った。ガソリン価格が容赦なく値上がりしているせいか、タクシー代の高さはかなり財布に堪えた。ちょうどサッカー・ワールドカップが開催されており、準決勝のモロッコ対フランス戦の夜、テレビ観戦する人たちの歓声が街のあちこちで上がった。モロッコとパレスチナの旗を同時に掲げて写真を撮りあう若者たちの姿だけが、数少ない明るいシーンとして印象に残っている。

主に滞在した東エルサレムでは、シェイク・ジャラ地区を訪ねてみた。ナクバ(「大災厄」: 1948年のイスラエル独立に際する住民追い出しと難民化)以来、一貫してつづいているパレスチナの民族浄化のプロセスで、近年、焦点となっている地区である。この地域での衝突を発火点とする政治的緊張は、訪問の前年、2021年5月のイスラエル軍のガザ空爆(256人死亡)に至った。その後も、イスラエルの治安当局とパレスチナ人との緊張は依然として続いており、とくにジェニンなど「自治区」の北部では治安が悪化していた。結局のところ、ラマッラーとベツレヘムに滞在し、ハイファとテルアヴィブに立ち寄ったくらいで消化不良の旅となった。実際、北部では多数の犠牲者が出ていたし、日本のメディアではほとんど報道されないが、その後、イスラエルで極右政権ができると、年を越してその数は増え続けている。

滞在中、パレスチナを代表する画家のナビール・アナーニーさんとお目にかかる機会を得

た。ラマッラーのご自宅に招かれ、歓談する中で、北部を訪問中に会ったエピソードをお聞きした。ナブルスからの帰り道、運転していた車に、いきなり入植者の男がボンネットの上に乗っかってきた。慌てて急停車して上の方を見ると、イスラエルの兵士が銃をこちらに向けて構えている。おそらく自分がもう少し若かったら（画伯は1943年生まれ）、何とか理屈を付けられて殺されていただろう。若者が何の罪もなく殺害された後、ナイフを近くに置かれ、テロに対する正当防衛だったと処理されるケースも多いのだ、という話であった。

1999年の春に家族でパレスチナを訪れたことがあった（やはりエジプトに長期滞在中のとき）。そのときも今回とよく似た、深い社会の鬱屈の雰囲気を感じた。その翌年には、アルアクサー・インティファダが勃発している。さて、研究機関のPASSIA (Palestinian Academic Society for the Study of International Affairs)を訪れたのは、この1999年の3回目の訪問のときが初めてである。継続的にパレスチナ問題を研究しているわけではないので、まったく不勉強ではあるが、今回23年ぶりに訪問してみると、たくさんの研究報告書が出版されていた。

その中で関心を引いたのが、ハリール・ナフレ (Khalil Nakhleh) 著の『パレスチナ開発の神話：政治的援助と持続可能な詐欺』(The Myth of Palestinian Development: Political Aid and Sustainable Deceit) である。かなり前の2004年刊行なので、すでに日本で紹介があるかもしれない。同書は、1993年オスロ合意の以前の時期(1984-93年)と以後の時期(1994-2002年)を比較して、パレスチナへの開発援助の問題点を告発している。副題にある「持続可能な詐欺」という言葉が、皮肉が効いている。

著者は文化人類学者であるが、この二つの時期を通じて、長らくパレスチナでの開発援助の実務にたずさわってきた。オスロ合意以前の時期では、ジュネーブに本拠地を置く「福祉協会」(Welfare Association; アラビア語名「相互援助基金」Mu' assasat al-Ta 'awun) のプログラム局長を務めた(二つの名称が異なるところが、同団体の複雑な性格を示している)。また、オスロ合意以後の時期は、パレスチナ地域開発ヨーロッパ委員会の教育部門の顧問として援助業務に関わってきた。同書は、そのときどきの政治の荒波を受けた開発援助の経緯と問題点を分析している。その内容をここですべて紹介することはできないので、さしあたり前者のオスロ合意以前の時期に関して感想の一部を述べるにとどめる。

この時期の開発的介入は、「スムード」(“不屈の忍耐”)と呼ばれる占領地住民の抵抗運動(1984-87年)を受けて始まった。しかし、アラブ関係機関からの援助は見かけ倒しだった。また著者本人が関わった団体も深刻な内部の問題を抱えていた。団体の運営主体は、「民族資本家」のディアスポラのビジネスマンと「ブレイン」の知識人からなっていた。ただし、その関係は従属的なものであった。企業家におべっかをするだけの専門家たちは、「ケーキをデコレートする」役割を演じたただけだった。さらにインティファダが始まると(1987年)、PLO内部の派閥争いの影響を受けた。チュニスのPLO本部やファタハとの関係を言い立てる、アブー何々というコードネームを名乗る人物たちが暗躍した。

オスロ合意以後の時期の開発援助に関する部分は、詩人の故ムーリド・バルグーティー氏

の自伝的小説『私はラマッラーを見た』（英訳 2003 年：第一回ナギーブ・マハフーズ賞受賞作品）が描いた状況を連想させる。同氏が故郷を訪ねてみると、その「自治区」ではかつての解放運動の闘士たちが、イデオロギーも節操もかなぐり捨てて、地位や特権を求め、チンパンジーのように木を登っていた、という状況である。

安易な比較はすべきではないが、ユダヤ国家建設のための経済的基礎を築こうとしたユダヤ民族基金やユダヤ機関と、PLO を中心とするパレスチナ人の民族運動組織との間には、どうも大きな違いがあったように思える。本書を読んであらためてそうした素朴な感想を抱いた。もちろん、この両者の相違は、近代欧米人とムスリム・アラブの間の「民度」の違いなどではない。また、それぞれが置かれた「植民地支配」の状況や性格も異なる（シオニズム運動の入植者的植民地主義の問題も含めて）。より深い根の広がりを持った問題がそこにある。

かつてパレスチナ問題は、アラブ世界を結びつける基軸としての役割を果たした。しかし、同書が告発するような、民族主義的な開発の主体としてのパレスチナ民族運動が抱える困難を考えると、パレスチナ問題とは、むしろ現在のアラブ社会全体が直面する課題（わかりやすく言えば、民主化と開発の問題）を映す鏡となっているのではないかと、とも思える。

金をむしり取られた感じがするタクシー運転手のそれぞれには、良い印象を覚えていない。しかし、彼らからふっかけられた法外な料金も、家族とその生活のためであろう、と考えることにした。コロナ渦による観光客の激減を訴え、喜捨と思って支援してくれないか、と訴える運転手もいた。

もっとも彼らの中には、なかなか事情通の人物もいて、「自治区」の経済事情について、こちらが訊かないのに批判的な「講義」をしてくれた。エルサレムとラマッラーの間にあるカランディア検問所近くの間接地帯は、法制度上、行政当局の関与が及ばない地域となっていて、そのため非合法的な経済活動が横行しているのだ、という話もあった。また、さきほどの本で紹介された「福祉協会」（「相互援助基金」）の創設メンバーの「民族資本家」のM氏が豪邸を構えていて、イスラエル治安当局が厳重に保護している、と苦々しく語ってくれた。

そうした話を聞くと、「自治区」の上に築かれた占領経済体制は、なにやら複雑怪奇な構造となっているようである。この従属的な構造は、国際的な支援を受けて、ますます強度を増しているのだろう。その一方で、パレスチナの人々が日常的に被る暴力は、世界から見えなくさせられている。ワールドカップの夜、一瞬、輝いた歓喜の光は、漆黒の闇の中に消えていっただけだったかもしれない。しかし、その闇の中から何が立ち現れてくるのか、誰も予想することはできないのである。